

# 推定信濃国府

— 第五次調査報告書 —

1987・3

松本市教育委員会

# 推定信濃国府

— 第五次調査報告書 —

1987・3

松本市教育委員会

# 序

推定信濃国府の発掘調査は昭和57年度より行われ、今年が5年目となりました。この調査は初年度着手の時より、先ず5ヶ年計画で調査を行うようとの、ご指導を頂いておりましたので、今年が最終年度でもありました。

本年度は地主の横田作重氏のご協力を頂き、本郷地区内の大村で発掘調査をいたしました。その結果については後述のごとくであり、小範囲の発掘面積に対して、古墳時代から平安時代までの住居址5軒を検出して、一応の成果をあげることができました。しかし、探し求める信濃国府の遺構には当たらず、国府についての手がかりは得られませんでした。

本報告書は今次調査の報告とともに、5ヶ年の総括をも加えており、これら調査結果が更に今後の調査の手がかりとなり、広くご活用いただければ幸いです。

終わりに5年間にわたり、ご指導頂きました文化庁、奈良国立文化財研究所、長野県教育委員会はじめ、関係機関、更にはご多忙の中、指導者としてご指導頂きました木下 良、山中敏史、桐原健先生、また、ご協力頂きました地元研究者および関係各位に厚くお礼申し上げ、序といたします。

昭和62年3月

松本市教育委員会教育長      中 島 俊 彦

# 例 言

1. 本書は昭和61年10月20日から昭和61年11月8日にかけて行われた、重要遺跡推定信濃国府第5次発掘調査報告書である。
2. 本調査は信濃国府確認緊急調査として、国庫・県費補助をうけて行ったものである。
3. 本調査は土地所有者横田作重氏のご協力をうけて行ったものである。記して謝意を表す。
4. 本調査には木下 良、山中敏史、桐原 健先生のご指導を頂いた。記して謝意を表す。
5. 本書の執筆、編集および実測、トレースは専ら神沢が行い、土器復元は滝沢智恵子が専任し、実測では直井雅尚の助力を得た。
6. 出土遺物および図類は松本市立考古博物館に保管してある。

## 目 次

例言・目次

序

### 第1章 発掘調査に至る経過

第1節 今までの調査の概要と今回調査に至る経過…………… 1

第2節 調査体制…………… 2

第3節 調査日誌…………… 2

### 第2章 遺跡の環境

第1節 自然的環境…………… 5

第2節 周辺遺跡…………… 5

### 第3章 発掘調査

第1節 調査の概要…………… 7

第2節 遺 構…………… 7

第3節 遺 物…………… 11

第4章 まとめ…………… 18

# 第1章 発掘調査に至る経過

## 第1節 今までの調査の概要と今回調査に至る経過

昭和56年12月に市道開発に先立つ発掘調査が行われ、弥生時代後期の生活面と明治時代前後のものと思われる暗渠排水の石の列を検出した。この場所は惣社伊和神社の西北約200mあまりの位置にあり、国府に関わる地名の惣社に近いところから、何らかの遺構に当たれば良いかと期待されていた所である。この後昭和57年度より国の補助事業として本格的に国府調査に着手したのである。

昭和57・58年度の第1・2次調査は、56年調査地点のすぐ東側、伊和神社寄りの農林水産省蚕糸試験場中部試場の桑園を発掘調査させていただいた。その結果は6軒の平安時代の竪穴住居址とU字型の溝、ピット群などとともに、石群の広がっているのが検出された。しかし、この石群は自然か人為か疑問の残ったままである。この発掘調査のほか、周辺地域を細かく表面採集して歩いた。その結果は惣社伊和神社を拠点として見た場合、西側は町並みが続いていることと、西傾して河川の氾濫原の中心に向かうことなどから、比較的遺跡は少なく、南方向は南西側に弥生時代の集落があり、それより東に平安時代を主とした集落が続いている。東方向では山辺谷につながる東接する下原遺跡をはじめ、奈良・平安時代の遺構が多い。北方向では山際から現在の集落にかけて縄文・平安時代の遺構がかなりの密度で続いている。こうしてみると伊和神社はむしろ遺構群の西端に近い位置にあることになる。また伊和神社東の南北に走る道の北東の約500m四方は、ずれてはいるが、6分割された柵目の道があることも指摘された。

昭和60年度の第4次調査は湯川右岸の下の丁地籍を調査した。この地は1・2次調査地の北西200mあまりにあり、国府の下の丁ではないかとの考えで調査をしたが、若干の遺物が散見されたのみであった。

このような状況のため、調査地点の設定には的確な判断材料がなく苦慮したが、本年度の調査地選定には国司塚(国司紀文幹を葬った古墓との伝承あり)東方100mあまりの畑をえらんだ。なお、本年は昭和42年に発掘調査された大村廃寺址を、市単独事業で調査する機会に恵まれたので、徐々にはあるが、国府推定地周辺の調査済み範囲を拡大する方向で進んでいる。

本調査は総額100万円で、そのうち国から50%、県から15%の補助を得、残り35%は市の負担である。各種届け出、通知書類は次のとおりである。

昭和61年1月10日	昭和61年度文化財関係補助事業計画書提出。
7月25日	昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
8月23日	同 交付申請書(国庫)提出
10月18日	信濃国府確認緊急調査について通知提出

昭和61年10月28日	昭和61年度文化財保護事業補助金交付申請書（県費）提出
11月7日	昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金交付決定（国庫）通知
11月12日	発掘調査終了届・埋蔵文化財拾得物届・同保管証提出
11月27日	埋蔵物の文化財認定について通知
12月20日	昭和61年度文化財保護事業補助金交付決定（県費）通知

## 第2節 調査体制

指導者	木下良	国学院大学教授	
	山中敏史	奈良国立文化財研究所主任研究官	
	桐原健	長野県立筑摩高等学校教諭	
調査団長	中島俊彦	松本市教育委員会教育長	
調査担当者	神沢昌二郎	松本市立考古博物館館長	日本考古学協会員
調査員	西沢寿晃	信州大学医学部助手	同
	三村肇	会社員	長野県考古学会員
	横田作重	農業	同
	太田守夫		
	森義直	長野県立大町高校教諭	
事務局	浜憲幸(社会教育課長)、岩淵世紀(文化係長)、柳沢忠博、大村敏博、熊谷康治、直井雅尚(主事)、岩野公子(臨時)		
協力者	瀬川長広、大出六郎、鶴川登、赤羽包子、吉沢克彦、西原いさ子、西原明子、佐野貞男、小松まさ子、綱島甲十枝、当田ふみ子、保刈英子、竹内国武、吉沢詮三郎、塩原久和		

## 第3節 調査日誌

61. 10. 17(金)晴れ 午後、考古博物館にて必要用具荷積み、発掘現場に運搬。テントを張る。近隣民家に挨拶。参加者 瀬川長広、大出六郎、鶴川登、塩原久和、神沢、熊谷、木下。
10. 20(月)快晴 発掘開始。1～3 G（各5×5 m）設定、表土はぎ。1 G－30cm、2 G－15cm、3 G－35cmまで掘下げ。－35cmで黒色土出はじめ、遺物はこの層にある。須恵器片土師器片、現代陶磁器片出土。市民タイムス取材。参加者 三村肇、横田作重、瀬川、赤羽包子、吉沢克彦、西原いさ子、西原明子、佐野貞男、小松まさ子、綱島甲十枝、当田ふみ子、保刈英子、神沢
10. 21(火)晴れ 1 G掘下げ、北西二辺を地層確認のため－80cmまで掘る。東端近くで溝が

落ち込む。2 G 中央で3.8×3.2mの落ち込みあり。1 住とする。3 G 黒色土の落ち込み不明。市広報取材に来る。参加者 横田、瀬川、大出、赤羽、佐野、西原明、西原い、綱島、小松、当田、保刈、神沢

10. 22(水)小雨、曇り 1 G 北壁、西壁セクション図とり、東側掘下げ。3 G 西、南拡張。4 G 掘下げ。周辺での標高基準点を探す。参加者 横田、赤羽、佐野、小松、当田、保刈、西原明、西原い、大出、神沢
10. 23(木)晴れ 1 G 東拡張掘下げ。4・5 G を掘込み、1 G を埋めもどす。テント西側6.7 G で黒色土の落ち込みをさがす。参加者 横田、赤羽、西原明、西原い、竹内国武、佐野、小松、当田、保刈、神沢
10. 24(金)曇り 4 G 掘下げ、住居址確認、2 住とする。西側にカマドか、検出面より灰釉坏、土師内黒坏など出土。5 G 掘下げ、-40cm で大礫検出、カマドの石か。標高測り出し。調査地点内BMは 624.4m である。参加者 横田、瀬川、赤羽、佐野、竹内、西原明、西原い、当田、保刈、大出、小松、神沢
10. 25(土)快晴 2 住掘下げ。2 G、3 G の間拡張し 2 G 西の面で1 住の線を確認。3 G 掘込み、サブトレを入れて落ち込みを探す。参加者 横田、赤羽、吉沢克、西原明、西原い、竹内、佐野、吉沢詮三郎、小松、当田、綱島、神沢
10. 27(月)曇り 1 住掘下げ、西方で礫が出、縄文後期の土器片出土。床面の位置がはっきりしないが、土師器出土面とみなす。2 住掘下げ、-60cm でも床面に達せず。3 住掘る。3 m 内外の小さい家である。トランシットで杭打ち。参加者 三村、横田、大出、佐野、吉沢詮、西原明、西原い、赤羽、吉沢克、鶴川、綱島、小松、当田、神沢
10. 28(火)曇り 1 住カマド精査、遺物取り上げ、セクション図とり、集石洗出し、2 住掘下げ、セクション図とり。3 住床面まで掘下げ。5 G 集石実測。参加者 横田、三村、西沢、瀬川、大出、赤羽、佐野、西原明、西原い、鶴川、竹内、小松、綱島、当田
10. 29(水)雨、曇り 1 住柱穴P<sub>1</sub>半割。2 住壁検出と床面の精査。3 住セクション図作成。5 G 集石はカマドとなり、4 住とする。参加者 横田、三村、西沢、赤羽、鶴川、西原明、

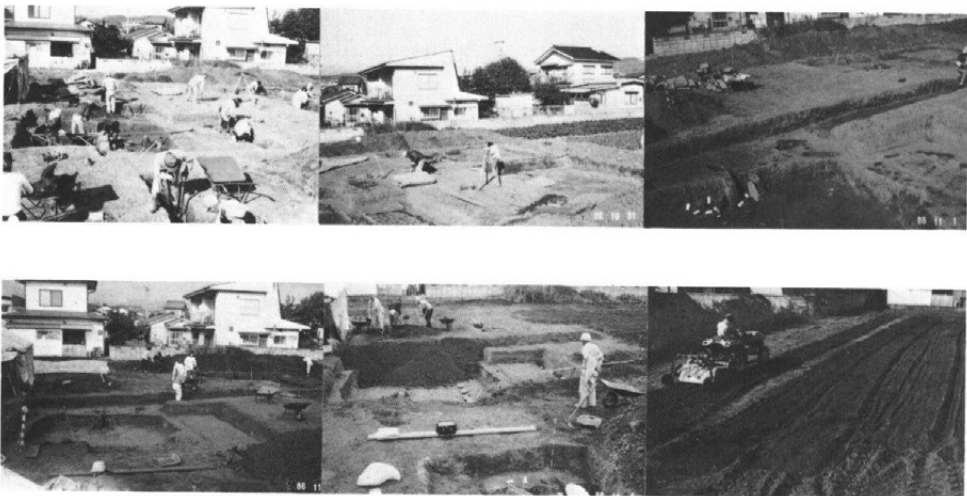


西原い、佐野、竹内、吉沢詮、小松、当田、綱島

10. 30(木)晴れ 2住ベルトはずし、実測図とる。3住掘下げ精査、土器実測取り上げ、床面精査。4住精査、5Gのセクション図取る、5住の存在可能。参加者 横田、三村、西沢、赤羽、鶴川、吉沢克、佐野、竹内、西原明、西原い、小松、綱島、当田、保刈、瀬川、大出
10. 31(金)快晴 1・2住セクション図とる。2住精査。2住西側柱列検出作業、南北に5本並ぶ。4住周辺整理、表土はね。全体図とる。参加者 三村、横田、吉沢克、鶴川、赤羽、神沢
11. 1(土)快晴 1・2・3住清掃、写真撮り、遺物取り上げ。4・5住精査。森義直先生地質調査を行う。桐原健先生に現地指導を受ける。参加者 横田、西沢、赤羽、鶴川、吉沢克、瀬川、大出、神沢
11. 4(火)晴れ 1住カマド断ち切り。2住北側に穴あり。3住周辺及び1住から埋めもどし。4・5住遺物取り上げ、4住のカマドは塀の下になる。4・5住の測図。参加者 横田、瀬川、大出、赤羽、竹内、鶴川、佐野、当田、小松、保刈、神沢
11. 5(水)薄曇り 5住カマド断ち切り、測図。埋めもどし完了。近所へ挨拶まわり。参加者 横田、赤羽、鶴川、佐野、竹内、瀬川、大出、神沢
11. 8(土)晴れ テント解体、用具撤去。耕耘機により発掘地点の土ならし。参加者 神沢(耕耘機横田氏)

12月以降

土器洗い、注記、接合復元、測図、図整理、トレース、写真撮影、原稿執筆、割り付け等作業を行う。





## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 自然的環境

今次発掘調査を行った大村石原畑609地籍は松本市の東北にあり、三才山付近に源をもつ女鳥羽川が松本市内に入って2kmあまり下流の右岸約200mの位置にある。地形は北西に向かって傾斜しており、標高は624mあまりである。周辺はかつては畑と果樹園であったが、戦後より住宅が建ちはじめ、現在では住宅と畑とが半々位になっている。女鳥羽川は本郷地区の原、水汲付近から伏流水として地下浸透するために水量は減少し、本地籍一帯は地下水の低い地域となっている。また周辺は女鳥羽川の数次にわたる氾濫によって堆積された旧氾濫原であり、そのため押し出された礫が多く、畑の端には石塚ができています。

地層は第1層の耕作土が黒色の砂質土で20～30cmあまりで、第2層は黒褐色土で20cmあまり、第3層が黄褐色の細砂土で、遺構は2層と3層にある。この3層の下は河川の押し出しによる礫となり、押し出しの状況によって礫層が起伏しており、その厚さも10～20cmあまりと薄い。

### 第2節 周辺遺跡

周辺遺跡については第1次から第3次報告書に記載してあり、4次報告書ではその年の新発見遺物のみを記載したので、本書でも61年度に遺物の発見されたもののみを記す。

1. 大村廃寺址 テニスコート造成に先立つ発掘調査を行い、平安時代の竪穴式住居址1、掘立柱建物址2、竪穴状遺構1、溝2。土師器、須恵器、灰釉陶器、古瓦、帯金具、柱根などが出土。
2. 下原遺跡（山辺中学校敷地） 校舎改築に先立つ発掘調査によって、古墳時代の竪穴式住居址4、掘立柱建物址1、土壌・ピット多数。土師器甕2等出土。
3. あがた遺跡 高校改築に先立つ発掘調査によって、平安時代の竪穴式住居址12、土壌、溝、集石。土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器、鉄器等出土。

発掘地点

大村  
物社

県  
筑摩

深志

大村廃寺址

0 2000 M

調査地の位置

下原遺跡

あがた遺跡

第1図 調査位置図・分布調査範囲図

I・V・1・1・V次発掘地点

は調査範囲

0 500 M

# 第3章 発掘調査

## 第1節 調査の概要

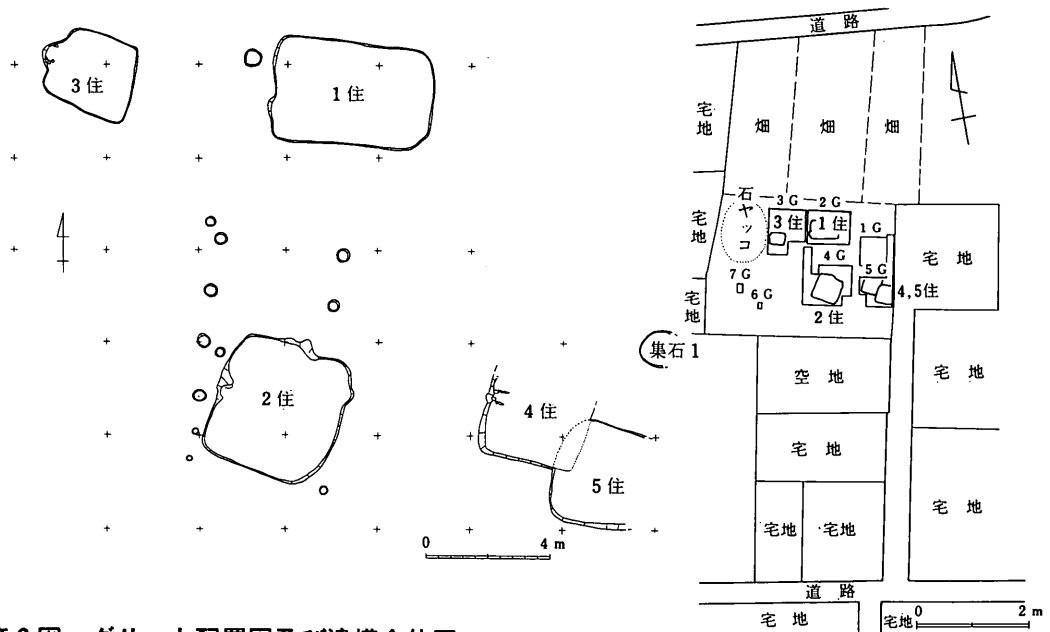
今回の調査地点は過去の耕作により土器片の出土を見ていたところであり、ある程度の遺構の存在は予想されていた。調査地は750m<sup>2</sup>あまりの畑で、西側は石が多いため北東側を中心に考えてグリットをあげた。結果的には5軒の古墳時代から平安時代の竪穴式住居址が検出されたが、一部は東側隣家塀の下になっており、一軒は調査地中央から検出された。遺構は表土から床面までは西側住居址が-40cmあまりと浅く、中央の第2号住居址が約80cmと深かった。

## 第2節 遺 構

### 1. 第1号住居址 (第3図)

第1号住居址は第2グリットとしてあけた箇所、調査区域の北側中央に位置し、その西側4mに第3号住居址が、南側6mには第2号住居址がある。本址の上面からは少量の土師器・須恵器破片を検出していたが、北側では-30cmあまりで20cm大の礫があり、縄文後期の土器片が30片ほど検出された。カマドは西壁中央やや南寄りにあり、石組みであったと思われるが、上面は耕作によ

(全体図)



第2図 グリット配置図及び遺構全体図

る削平で残っていない。ピットは中央よりやや北西に2本あるが共に浅く、本址のものかわからない。床面は不良で、カマド前面の焼土面をもって推定した。壁は四方とも浅く20cmあまりで、遺物は北西の礫の面から関東系の土師器の甕が、カマド周辺より小形甕が2点出土している。なお数年前の耕作時にも1点の甕が出土しており、今回もその破片の一部が出た。

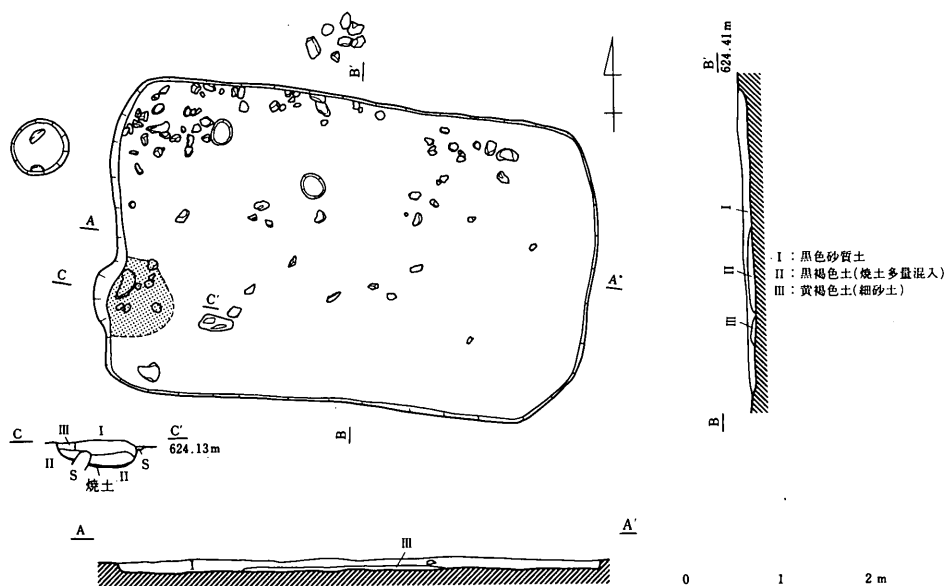
## 2. 第2号住居址 (第4図)

本址は第1号住居址より6mあまり南にあり、カマドは西壁のほぼ中央に石と土で作られたものがあった。煙道は検出されなかったが、これは後述するピット群との関係もあって、後に壊されたのかもしれない。壁は50cmと深く、北側に僅かに張りだす部分がある。床面は良好である。本址の西側にはφ40cmあまりのピットがほぼ2.5m間隔で4本あり、この東に5.2mを隔てて同様のピットが2本あった。これを見ると3間×1間の掘立柱建物址とも見えるが、第2号住居址の中ではピットは不検出であった。

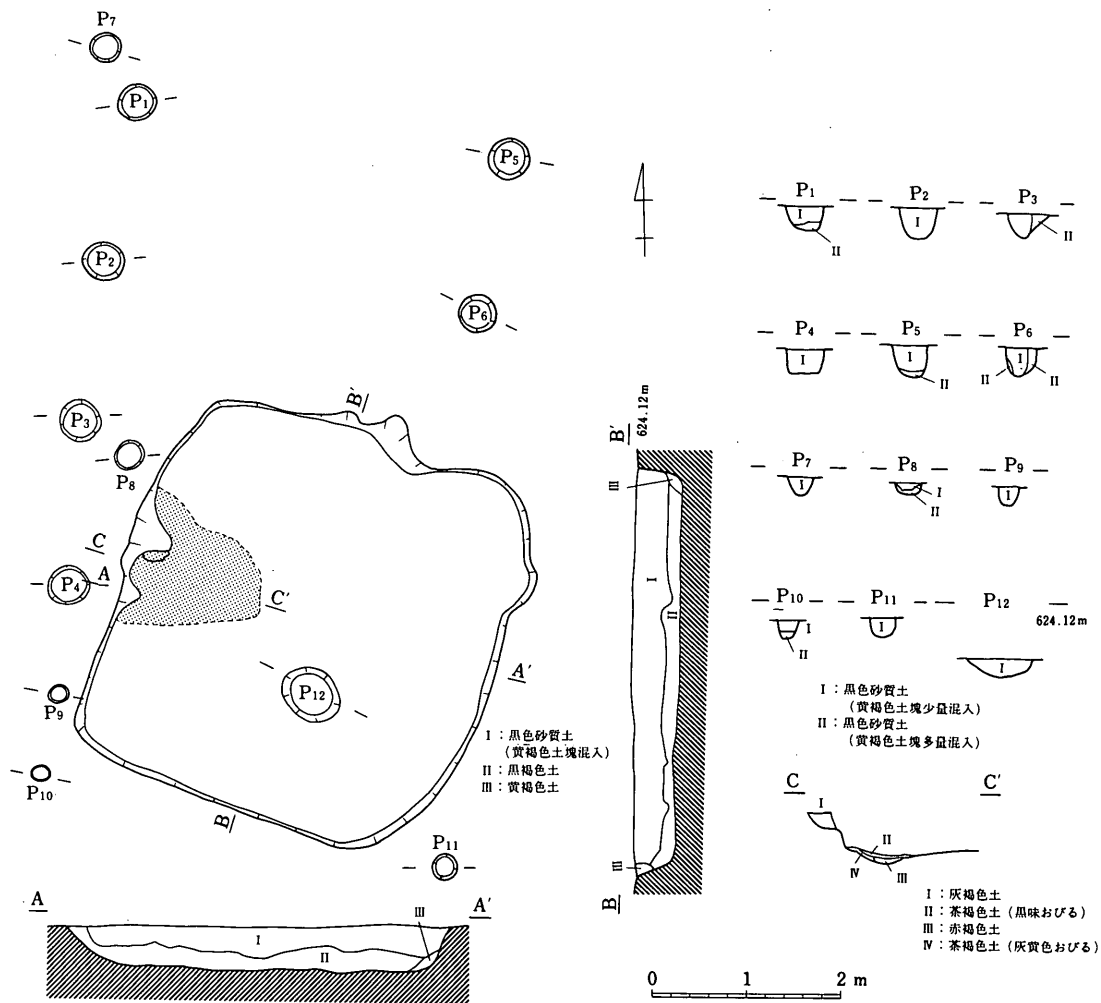
遺物は上層部より散見されたが、床面より30cm上から灰釉坏が出土し、床面よりはカマド周辺では坏、甕が8点、東壁近くでは甕、坏が各1点出土している。

## 3. 第3号住居址 (第5図)

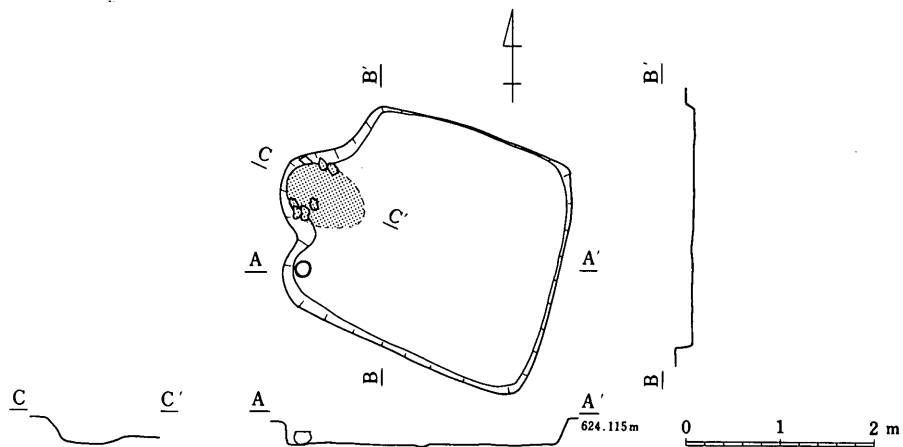
第3号住居址は第3グリットとしてあけた箇所、第1号住居址の西側5mにある。表土からの深さは約60cmと第1号住居址と比して深い。床面上部では10~30cm礫があり、その間に遺物が散在していた。カマドは西壁の中央に石組でつくられており、その左側には口縁部を欠く須恵器の甕が立った状態で出土した。柱穴はなかった。



第3図 第1号住居址



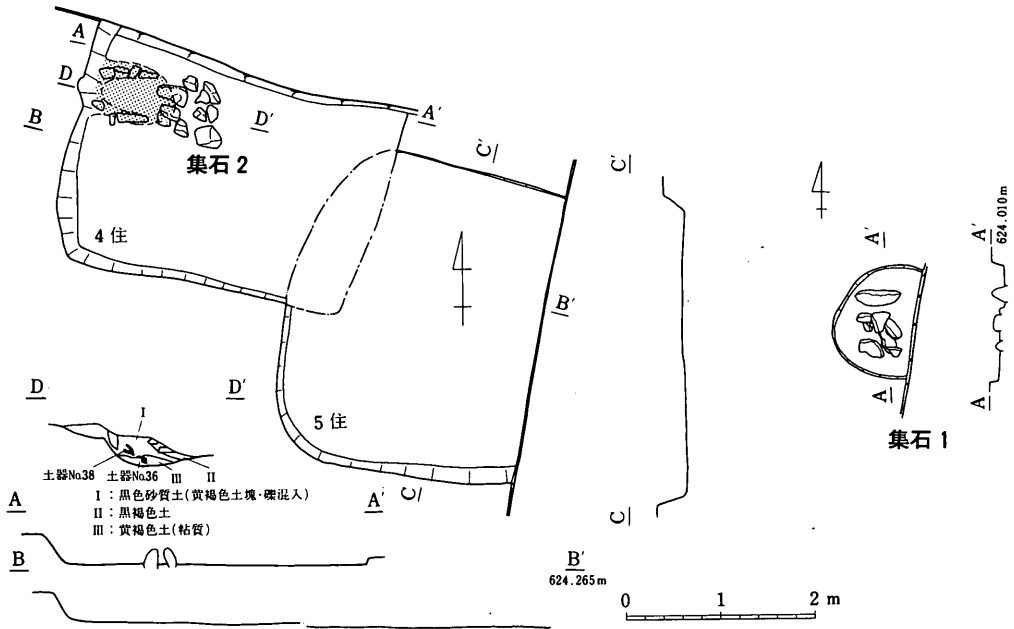
第4図 第2号住居址



第5図 第3号住居址

4. 第4・5号住居址、集石1・2 (第6図)

第4・5号住居址は第5グリットで検出されたもので、発掘地点の東端にある。2軒は切り合っているが、僅かに第4号住居址のほうが高い。カマドは第4号住居址は西壁に石組で、第5号住居址は東壁にあるが、第5号住居址のカマドはブロック塀の下になっていて様子がわからない。柱穴はともになく、第4号住居址のカマドの前には径1m弱の集石2があり、北側3mの地点にも同様の集石1があるが、落ち込みや伴出遺物もなく、時期は不明である。



第6図 第4・5号住居址

第1表 推定信濃国府V 遺構遺物一覧表

住居址 No	規模 (m)	平面形	主軸方向	ピット (cm)	カマド 位置	遺物	時期
1	5.0×3.2	長方形	N-5°-W	p1 25×27-10 p2 20×25-8	西壁 やや南	土師甕4(内関東系1、既出1)他 縄文後期土器片	7C後半 ~8C初
2	4.1×4.2	方形	N-17°-W	p1 64×54-21	北西壁 中央	土師環10、甕7、小形甕1、灰釉 環1他、土師器片多数	9C後半
3	2.7×2.5	方形	N-63°-W	—	北西壁 中央	土師環2、須恵環3、須恵甕3他 須恵片比較的多し	9C前半
4	3.4×—	方形	N-12°-W	—	西壁 中央か	土師環4、甕1、鉢1、須恵甕1	9C末~ 10C初
5	—×3.4	方形	N-15°-E	—	東壁 中央か	土師甕2、須恵環4、 須恵摺鉢か1	7C前半

### 第3節 遺物

出土遺物は図示した47点のほか、遺構覆土からも含めて第1号住居址から縄文土器片220g、土師器片920g、須恵器片110g、陶磁器片55g、第2号住居址からは土師器片2990g、須恵器片1476g、灰釉陶器片5g、陶磁器177g、第3号住居址からは縄文土器片10g、土師器片590g、須恵器片887g、陶磁器片360g、第4・5号住居址からは縄文土器片235g、土師器片555g、須恵器片885g、陶磁器片335g、表面採集などで土師器片70g、須恵器片46gである。総体的にみて第2号住居址が多く、第1号住居址が少ない。

**第1号住居址**（第7図1～6） 6の砂岩の凹石以外は土師器である。3は薄手の甕で、くし歯状工具で上部は縦に、下部は横使いで底部外面まで調整してある。下部近くは一部剥離しているところがあり、それを補修のために精製粘土をはってある。4は既出の甕で木葉底である。5は丸底の甕で口縁に横ハケ目があるほかは、全面をケズリで調整している。関東系の甕であろう。

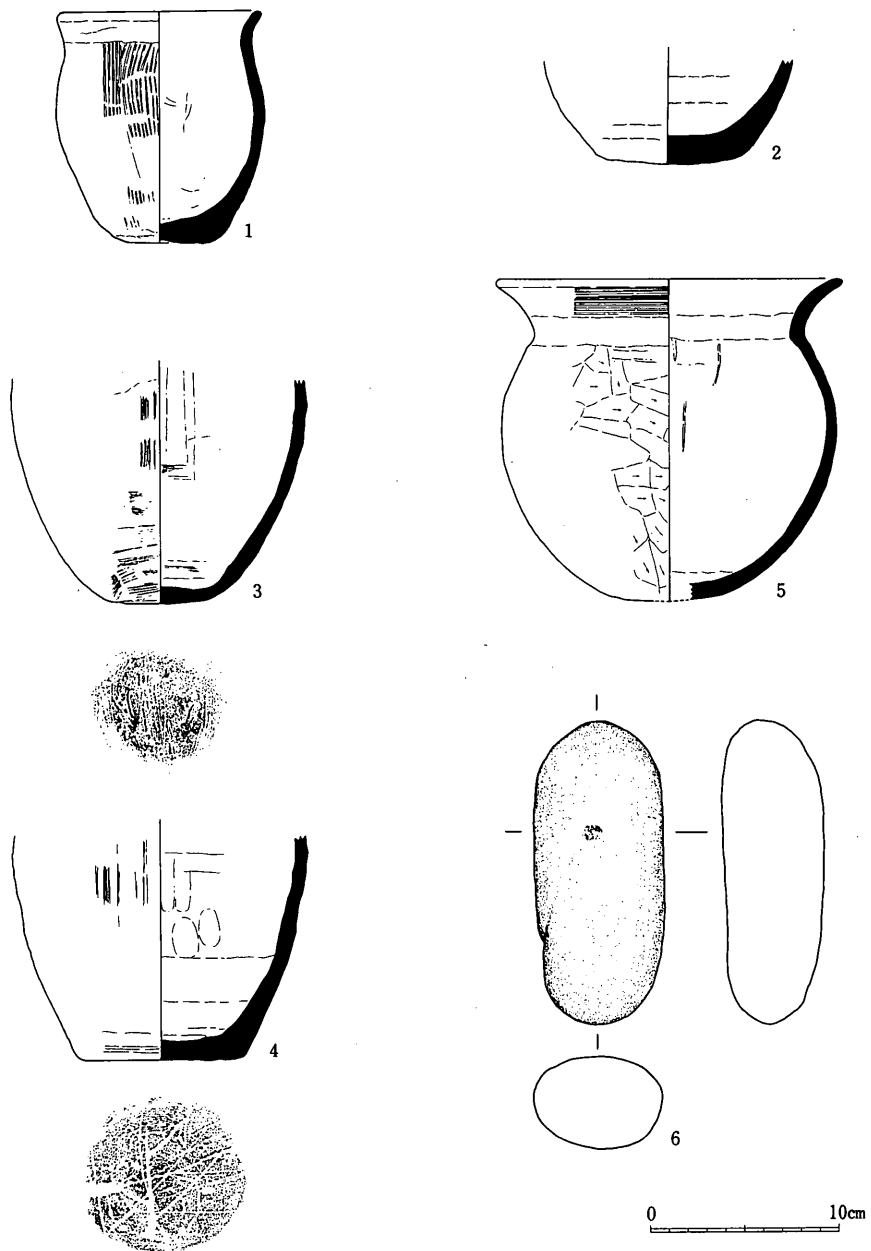
**第2号住居址**（第8・9図7～25）17の灰釉陶器杯以外は土師器である。7～17は杯または高台付杯である。以下25までは甕である。24はほぼ完形の甕で、外部は肩以下にハケ目を施し、上部のみカキ目、内面は頸部にカキ目、胴部には長いナデによる溝状調整痕、内面中下半部に僅かに黒色を呈する付着物がある。また口唇の一部にヒビを補修したのか粘土を塗ってある。

**第3号住居址**（第10図26～33）26・27の内黒杯のほかは、全て須恵器である。31は短頸壺で口縁を欠くが、下は完形である。ロクロ引き上げによる稜が強く、胴下半には火ダスキによる赤灰色を呈する。底は回転糸きり底である。32は四耳壺などの上部である。33は口径の大きい鉢あるいは甕で、格子状のタタキ目文で、その工具の先端の当たった跡が口頸部に残っている。内面は粗い調整痕の凹凸があり、底の内外も粗く削った跡などで平でない。器壁は比較的薄く、焼成もやや柔らかである。

**第4号住居址**（第11図34～40）40が須恵器の底部以外は土師器である。38はカマド内にあった鉢の土器である。口は大きく開き、肩から下には細かい縦のハケ目がつく。口縁は外面横ナデ、内面も軽いケズリか横ナデで、所々に巻き上げの成形痕が残る。胴部内面にはススの付着もあり、色調は二次焼成をうけて暗黄色または褐色を呈する。胎土には白色の微粒を加えて、全体的に粗い感じである。

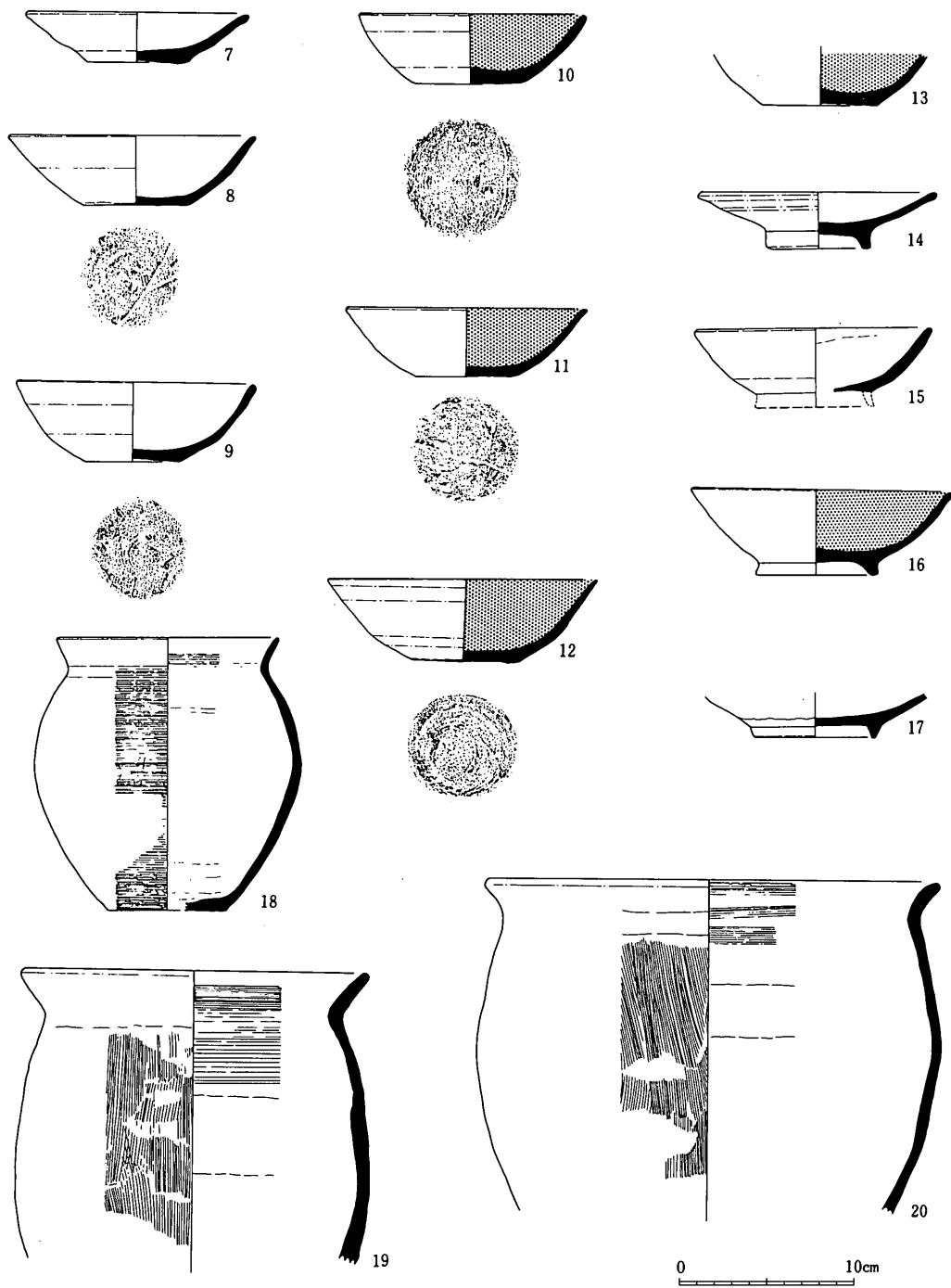
**第5号住居址**（第12図41～47）46・47は土師器、41～45は須恵器である。42は生焼けか表面が明赤黄色で断面は灰色で、焼成も柔らかである。底部にくびれを持ち、底はヘラ切りのようである。44は深目の椀形に近い杯であり、45は摺鉢の上部と思われる厚手の堅緻なものである。47は赤褐色を呈する丸味の強い甕で器面が荒れていて調整痕などは不明である。

これらの遺物・遺構からその属する時期は第1表のように考えられ、本市では類例の少ない遺物も含まれていて、興味ある遺跡といえよう。

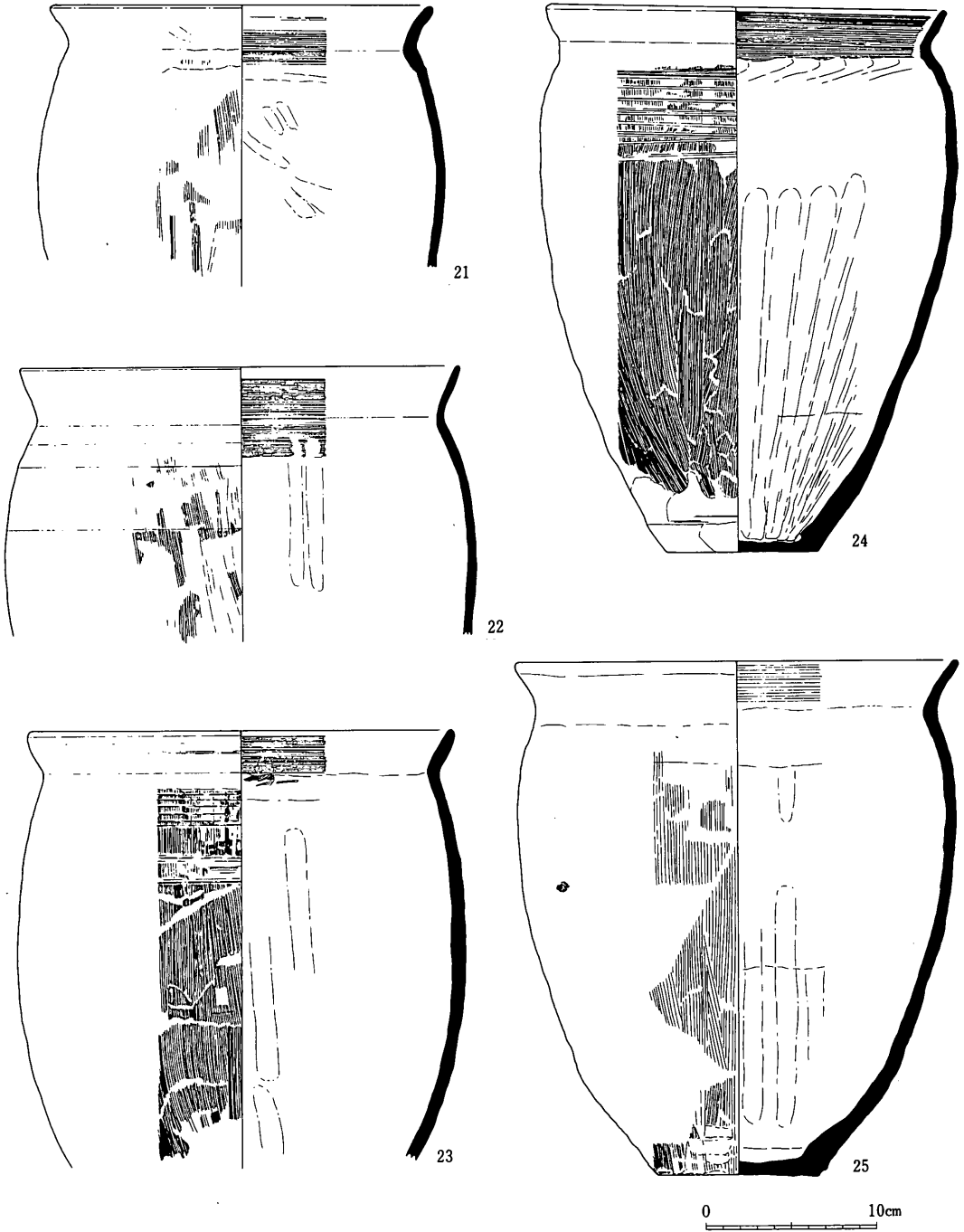


第7図 第1号住居址出土遺物

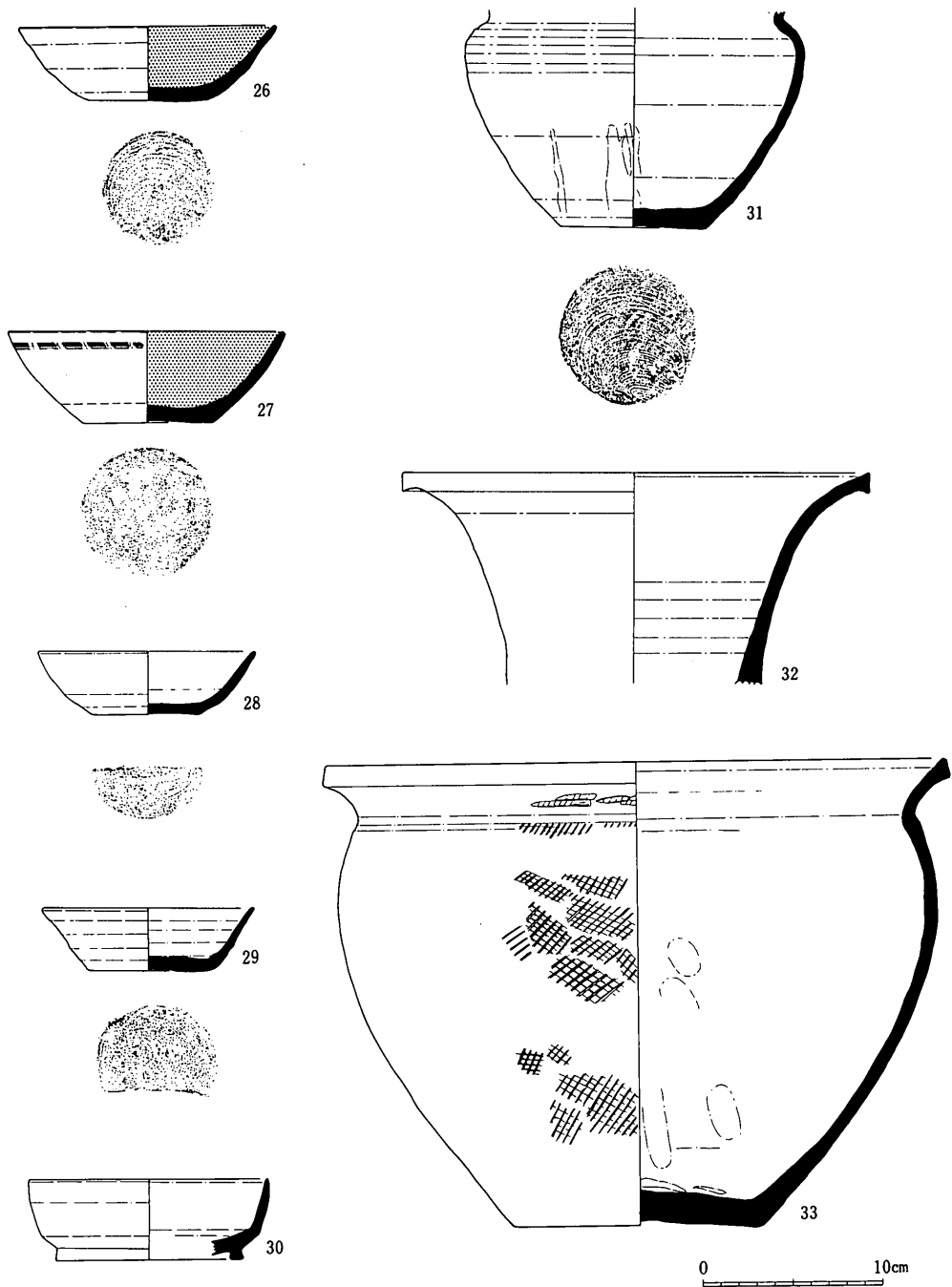




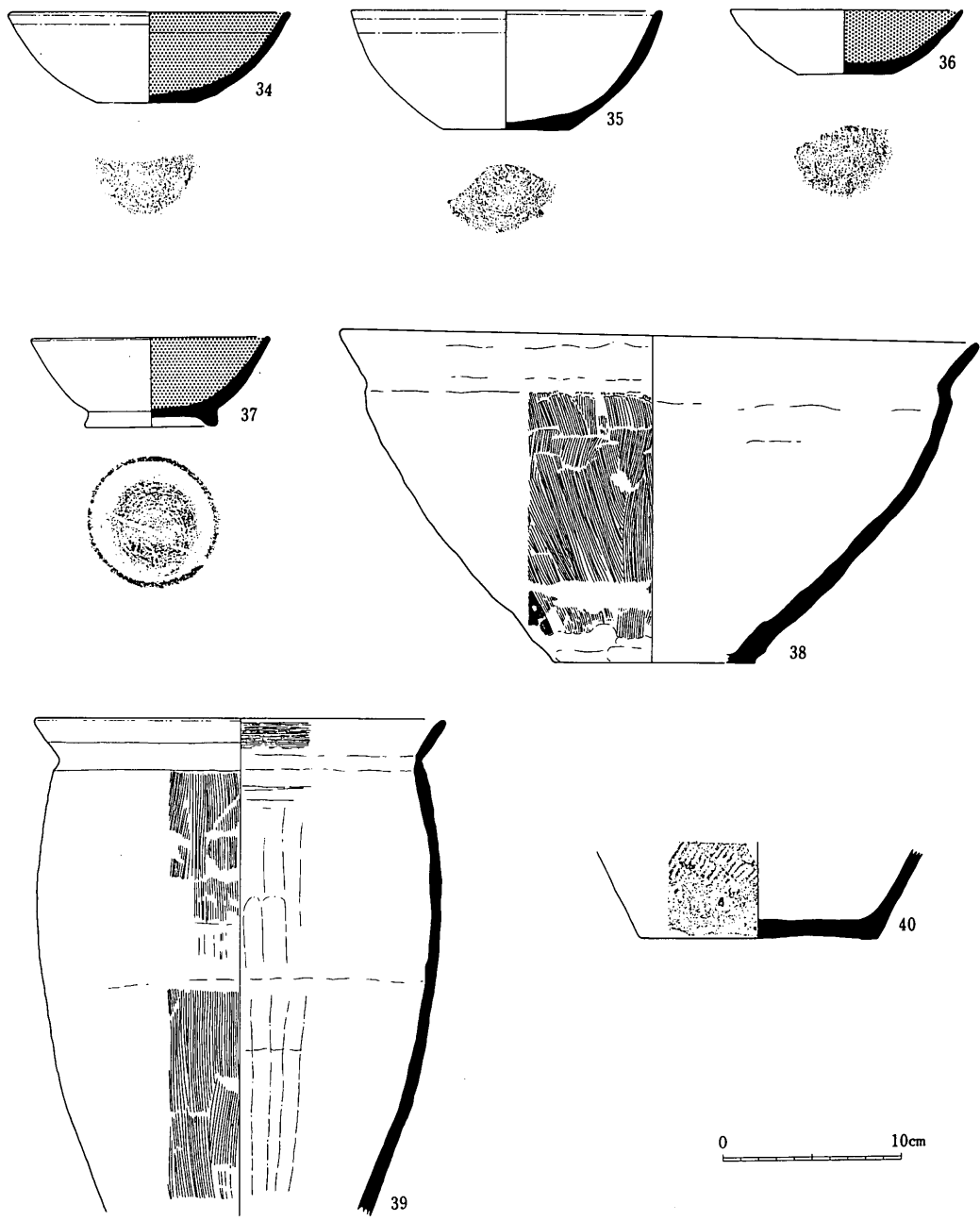
第8图 第2号住居址出土遗物(1)



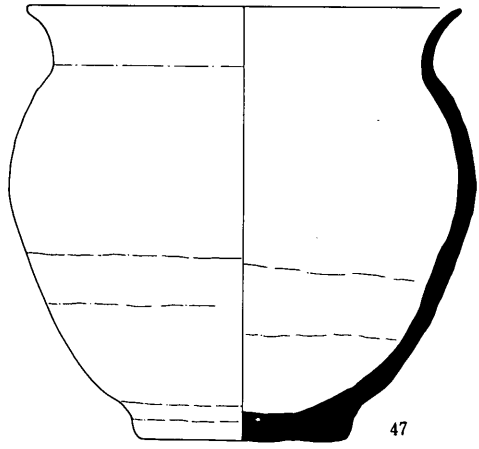
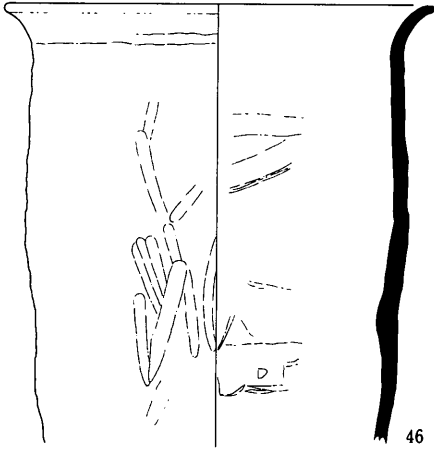
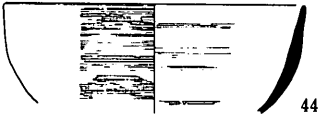
第9図 第2号住居址出土遺物(2)



第10图 第3号住居址出土遺物



第11图 第4号住居址出土遗物



第12图 第5号住居址出土遗物

## 第4章 まとめ

### 1. 国府調査の結果

信濃の国府は初めは上田にあり、延暦9年ころ松本に移ったろうと考えられている。松本における国府の位置については、深志説、大村説、筑摩説、惣社説があり、この点については第1次調査報告書で倉科明正氏が詳細に述べているが、惣社の地名・遺物からして惣社説が有力としている。この調査も惣社説をもととして惣社を中心に発掘・分布調査を行ってきた。

昭和12年堀内千萬蔵氏が『信濃』において惣社説を述べた時から50年を経て惣社周辺はおろか、松本市全体が大きく変わってきた。小字名はほとんど使われずに忘れ去られようとしており、地形もまた変貌しつつある。堀内氏は神社北側に薄川堤防の名残りの土堤があり、これが曲流する河流と異なり東西に走る点、国府に係わる旧堤ではないかとしているが、これも現在では一部に痕跡をのこすのみである。ただ惣社北西の惣社、下金井、荒井から湯の原へめぐる小路が一丁四方の条坊様の形式をとどめているとの指摘箇所は現存している。

このような地名・地形だけでは国府の位置はつかみえず、発掘調査によつての解明を期待しているのだが、結果は後述のとおりである。

第2表 推定信濃国府調査一覧

調査時期	調査地区	検出遺構・出土遺物
第1次発掘 表採	惣社 農林水産省桑畑 東地区(惣社、里山辺) 北地区(本郷大村、浅間温泉) 西地区(元町、横田)	平安時代竪穴住居址4、土壌5、ピット10、礫群、溝土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器 20地点。土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器片を採集 8地点。同上 土器、陶器、陶磁器片 3地点。弥生土器、土師器、須恵器片
第2次発掘 表採	惣社 農林水産省桑畑 東地区(惣社) 北地区(大村)	平安時代竪穴住居址2、Uの字状溝、礫群 土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器 79地点。縄文土器、石器、土師器、須恵器、灰釉陶器 中近世陶磁器片 6地点。同上 石器、土器、陶器、陶磁器片
第3次発掘	A 里山辺 下原 B 同 下畑 C 同 原畑 D 同 下原(中学校)	遺構なし、縄文土器片、古銭 遺構不明、土師器、須恵器片 溝状遺構、土師器片 古墳時代竪穴住居址1、土師器、砥石
第4次発掘	A 横田 下の丁 B 里山辺 下原(中学校)	遺構なし、土師器、須恵器、陶磁器片 古墳時代竪穴住居址1、土師器
第5次発掘	大村	古墳—平安時代竪穴住居址5、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器

この結果からは国府に関係する遺構・遺物はなにも見当たらない。しいて国府の存在した平安時代の遺物の濃密な地点を拾い挙げると、惣社伊和神社周辺の宮北遺跡、里山辺中学校周辺の下原遺跡、大村大宮神社周辺などである。

## 2. 松本市内全域の遺跡について

ここ10年あまりより松本市では緊急発掘調査が急増し、数多くの遺構・遺物の発見があった。本市の発掘調査の歴史は、古墳の発掘から見ると江戸時代にまで遡るが、調査記録の残っているものは大正時代のものであり、本格的になったのは昭和24・25年頃からである。これら発掘調査によって検出された遺跡の住居址と古墳の数は第3表のとおりである。

第3表 松本市における発掘調査遺跡住居址・古墳等一覧表

地区	住 居 址							建物址	周溝墓	古墳	計
	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	不明				
島 内	—	—	—	—	26	1	—	14	—	—	41
新 村	—	—	—	—	1	—	—	—	—	14	15
島 立	—	12	8	34	125	9	11	99	—	—	298
和 田	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
神 林	—	—	—	—	79	—	—	32	—	—	111
笹 賀	14	—	—	—	8	—	—	—	—	—	22
今 井	—	1	—	—	3	—	—	—	—	—	4
内 田	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19
中 山	5	—	—	—	—	—	—	—	—	6	11
寿	14	2	13	—	15	1	—	—	3	—	48
芳 川	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	3
里山辺	—	—	7	—	—	—	—	—	—	—	7
入山辺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
本 郷	5	1	1	2	9	—	—	—	—	5	23
岡 田	—	—	1	—	2	—	—	—	—	—	3
旧 市	—	104	5	—	22	—	—	—	1	1	133
合 計	57	120	36	37	291	11	11	145	4	26	738

(注) ①この表は長野県史考古資料編遺跡地名表および松本市教育委員会資料によって作成したものである。

②この表で取り上げた遺跡は住居址を中心としたものであり、この他に住居址が検出されなくても遺構・遺物の出ている遺跡がある。

このほか、長野県埋蔵文化センターによる中央道長野線に係わる発掘調査によって笹賀、神林、島立、島内地区内から平安時代を中心として1,000軒内外の住居址が検出されていると聞いているので、合計の数は大きく変わってくる。

この表からみればかぎり圧倒的に島立、神林のいわゆる河西部、奈良井川左岸に平安時代の大きな集落のあったことが窺え、また出土遺物も奈良三彩小壺、佐波理鏡、鍔帯など仏具や装身具といった一般の住居址からは出土しない貴重なものも出ている。

ここで考えられることは道である。このように大きな集落のあったことは、集落を結ぶ道があったと言うことである。信濃の国は近江、美濃、飛騨、上野、下野、陸奥、出羽の国の8ヶ国(721年、養老令)を結ぶ東山道が通り、信濃には美濃坂本の駅から、育良、賢錐、宮田、深沢、覚志、国府を経て錦織に至り、小県郡の浦野、亘理、清水、長倉を経て碓氷峠を越えて上野に至る。国府に至る前後の駅は覚志と錦織であるが、覚志駅は現在の村井付近、錦織駅は四賀村一帯と言われ、松本の東側を通過していたものと考えられている。

その点からして国府の位置が、女鳥羽川と薄川に囲まれる範囲にあるのではないかとの説が成り立つが、その範囲内の調査結果は先述の通りである。一方、長野県文化財保護協会では県内の東山道の調査に着手して、近々松本市もその調査を行う予定とある。この古道の調査結果から、逆に国府の所在地を窺い得ることも可能であろう。また、周辺遺跡の調査結果から当時の集落、道、人口などが判明すれば、国府の位置、規模などの解明の手掛かりになるものと思われる。共に期待するところ大である。

### 3. おわりに

5次にわたる調査結果のまとめを試みたが、調査内容を列記するにとどまった。全国の国府調査では何れも息の長い調査を続けており、それでも確定できないところもあると聞いている。10世紀以降は国庁構造の途絶や国衙の移転など変貌が激しかったとも言われるので、信濃の国府についてはかなりの覚悟で取り組まねばなるまい。学界においてもいろいろな意見があって、国府問題は今後の調査研究にまつところが大きいと思われる。

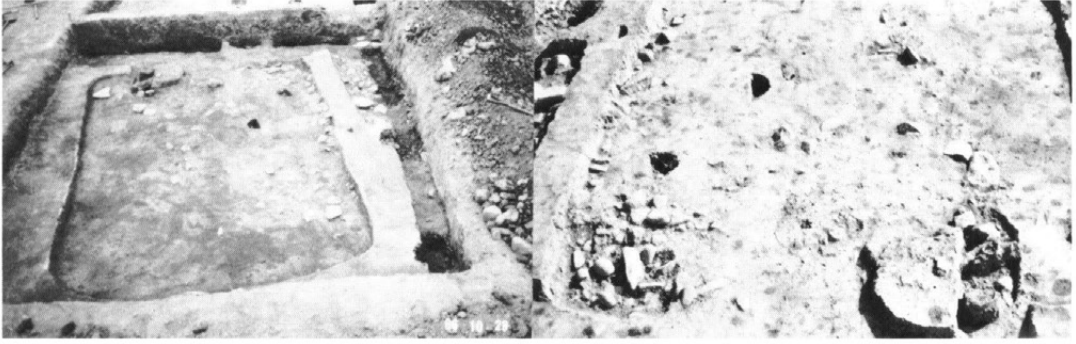
今回の調査には全国的な研究者の木下 良先生、山中敏史先生、桐原 健先生にご多忙のところ長期にわたってご指導頂いた。厚く感謝の意を表します。また長年来調査にご協力頂きました、関係各機関、地元研究者に心よりお礼申し上げます。

#### 主な参考文献

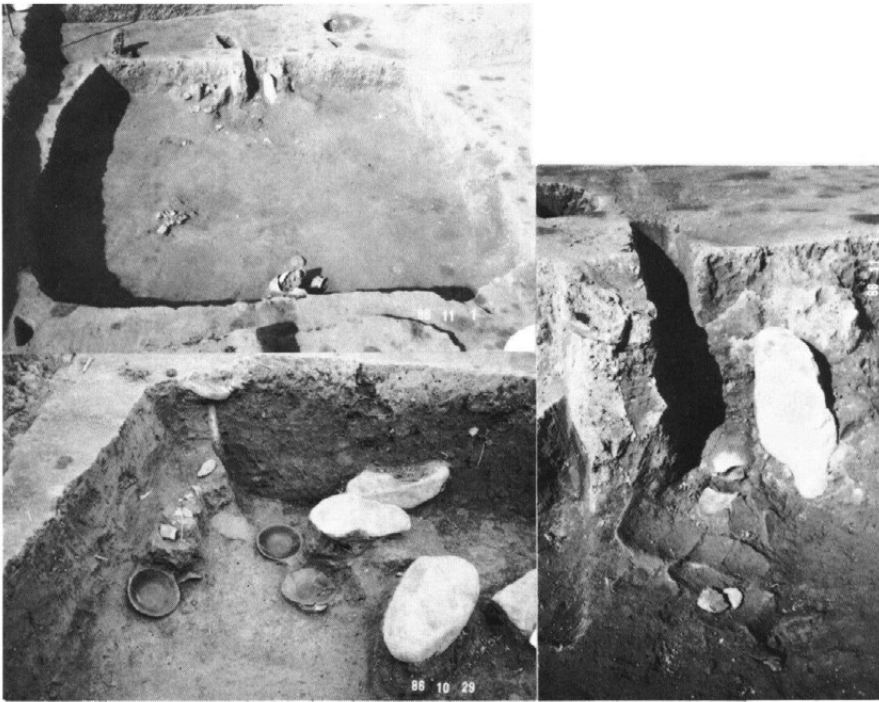
- 古代日本を発掘する—5 「古代の役所」 山中敏史、佐藤興治 岩波書店 1985. 6  
『信濃』 1—6—12 「信濃国府址の新検討—我惣社を見る—」 堀内千高蔵 昭12. 12  
『松本市史』 松本市役所 昭 8  
『松本市、塩尻市、東筑摩郡誌』 「歴史 上」 同 編纂会 昭48. 5  
その他 シンポジウム資料 「古代の国府」 昭和62年3月8日国立歴史民俗博物館開催のもの



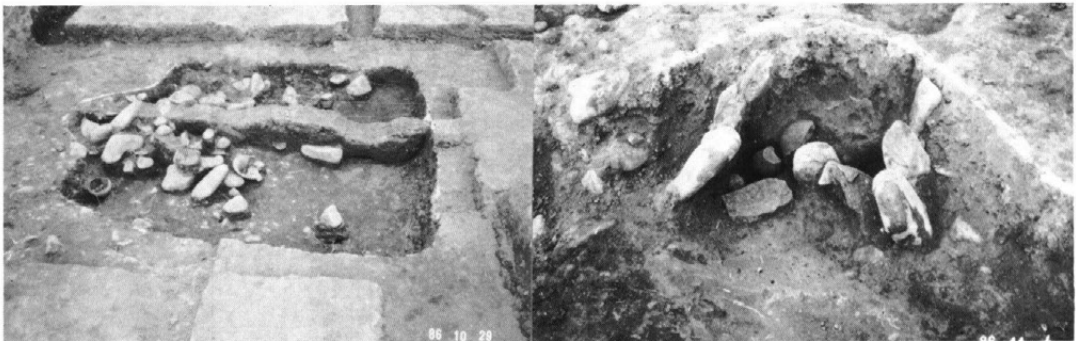
圖 版



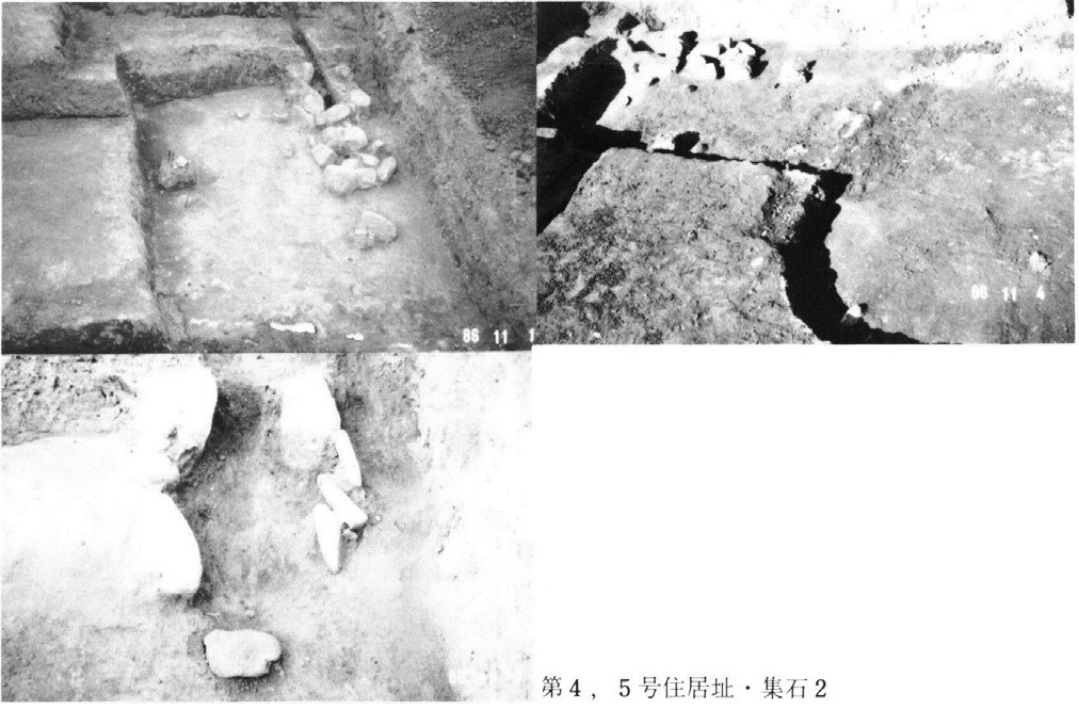
第1号住居址



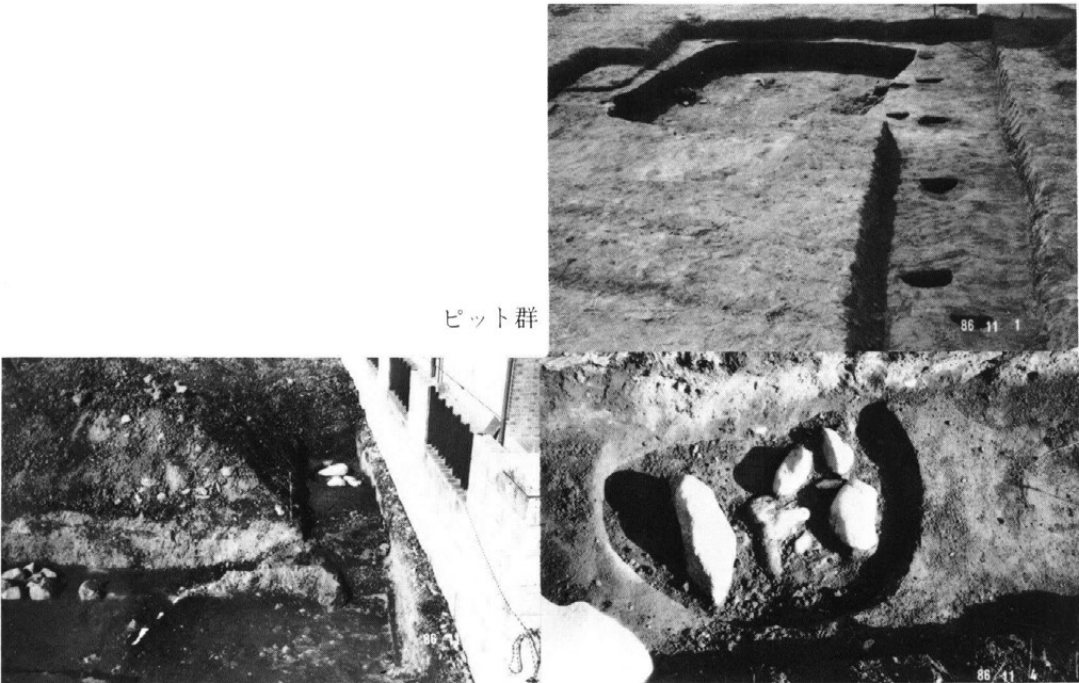
第2号住居址



第3号住居址



第4, 5号住居址・集石2

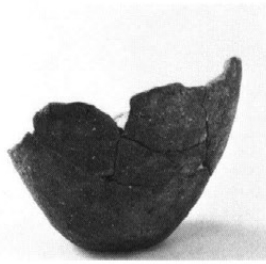


ピット群

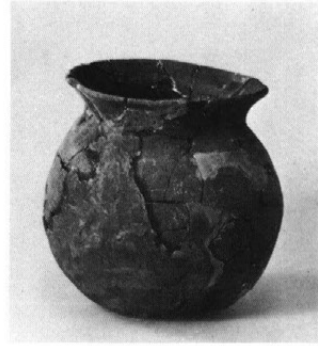
第4, 5号住居址と集石1



1



3



5



7



8



10



11



12



14



15



16

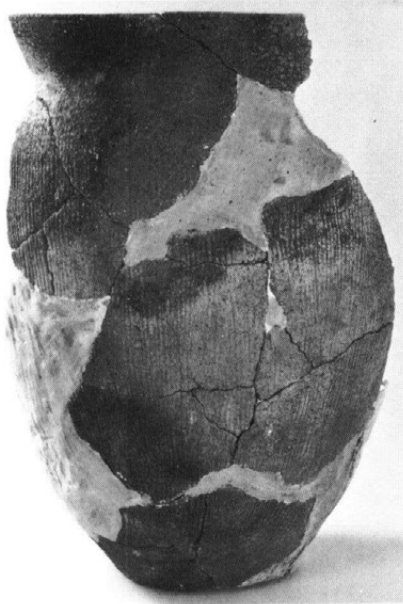


23



24

図版3 遺物(1)(縮尺は約 $\frac{1}{6}$ )



25



26



27



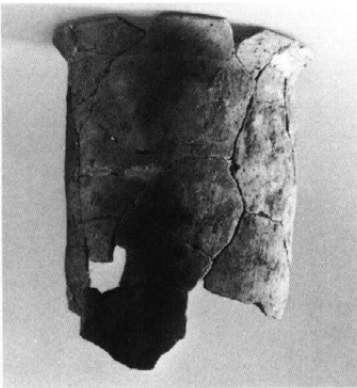
31



33



38



46



47

図版 4 遺物 (2) (縮尺は約 $\frac{1}{6}$ )

---

---

松本市文化財調査報告No.56

推定信濃国府 V

昭和62年 3 月20日 印刷

昭和62年 3 月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 アサカワ印刷(株)

---

---



